

スターリン主義批判本と人権

外 池 力

《論文要旨》

本稿では、スターリン主義の問題点について同時代に論じた戦前の書籍とスターリン主義に対する批判として画期的な著作であったソルジェニーツィンの『収容所群島』を中心に、アナーキズムによる独裁批判、粛清裁判、収容所などについて触れながら、スターリン主義と人権について考察する。ソ連の収容所に象徴されるスターリン体制は、数多くの著作によりその悲惨な事実が明るみに出されてきたが、それは様々な理由から正当化され、その原因の根本的な説明まで進まなかった。たとえばアナキストたちも自らの党派に対する弾圧について批判したが、自らが反革命的とみなした敵に対する暴力については正当化した。このように 20 世紀の歴史をみる際に不可欠な視点となる反資本主義、反ブルジョア、反個人主義の理念や平等主義的な情熱を共有し、また反ファシズム陣営の頂点にいたスターリン体制のことを考慮すると、「ファシズム＝悪」、「反ファシズム＝善」、「ファシスト＝人民の敵」という図式が強力に作用していたなかで、スターリン主義が、世界的に圧倒的な存在であったことを認めておかなければならない。しかし、1960 年代後半から人権の理念が広まるにつれ、政治的な暴力が普遍的に批判されるようになり、また大きな善を目指すのではなく、個別具体的な社会問題の解決への要求と取組みによる「悲惨の普遍化」がなされていった。このような流れのなかで人権が弱者救済の思想を担うことになるが、しかし、人権は、理論性、連帯性、変革性でスターリン主義には劣るので、救済の理念として宗教が頼られ再び暴力的な変革が求められている。そのような状況において、人権の理念をしっかりと位置づける必要がある。

はじめに

本稿では、ロシア革命やソ連に対する批判本を題材にしながら、スターリ

ン主義と人権について考察する。収容所に象徴されるソ連社会主義の問題点は、革命当初から繰り返し伝えられ、論じられてきたが、悲惨な弾圧などを引き起こしたスターリン主義についての根本的な解明はなかなか進まず、むしろ、ファシズムへの転向にみられるように別の形の独裁を支持するような方向性を示すことさえみられた。スターリン主義の問題について同時代に論じた戦前の書籍とスターリン主義に対する批判として画期的な著作であったソルジェニーツィンの『収容所群島』を中心に幾つかのトピックにしぼりながら、悲惨な事実がなぜ軽視され続けてきたについて論じることで、「悪」を正当化することなく、犠牲者を救済する思想について考察する。

1 スターリン主義への視点

スターリン主義についての本稿での考え方を示しておこう。スターリン主義を論じるには、一般的には次のような要素を中心に論じられる。①スターリン本人の考え方や統治のやり方、②スターリン時代の政治、社会、経済様式、③マルクス主義や社会主義の問題点、④スターリン的な政治に象徴される独裁的な統治のやり方である。たとえば、ジョゼッペ・ボッファは、「哲学的ないし社会学的一般化」を検討から除外したうえで⁽¹⁾、スターリン主義の歴史的要因についての議論を手際よくまとめている⁽²⁾。そして、スターリン主義については、「とりわけ左翼のあいだでは、圧制の意志、思想的不寛容、専制的傾向、行動方法の選択における十分な配慮の欠如、をけなす悪口のレッテルとして広まった」⁽³⁾とした。

スターリン主義の考察の対象とは、その原因や影響を考慮すれば、スターリン時代やソ連に限られることではない。もちろんソ連崩壊を境にして、現実の政治体制としてのスターリン主義を論じる意義は以前ほどはなくなったし、理論的にみても、社会主義やマルクス主義の影響力の低下に伴い、スター

リン主義研究の重要性も減少した。とはいえ、スターリン体制下での大虐殺がなぜ起きたのか、という歴史的な研究はもちろんのこと、社会運動や革命運動の現状や問題について論じる場合にも、スターリン主義の考察は普遍的に応用できる。

本稿では、スターリン主義について「理想を目指したにもかかわらず、悪に転化した政治的経験」として理解する。おそらく、「理想を目指したにもかかわらず」というところが現在では受け入れにくいのかかもしれないが、20世紀の歴史をみる際に不可欠な視点となる反資本主義、反ブルジョア、反個人主義の理念や平等主義的な情熱を共有したスターリン体制に対する国内外からの幅広い支持に加え、戦前の人民戦線にはじまり戦後しばらくの間は、反ファシズム陣営の頂点にいたスターリン体制のことを考えると、「ファシズム＝悪」、「反ファシズム＝善」、「ファシスト＝人民の敵」という図式が強力に作用していたなかで、反資本主義や反戦平和の象徴としてのスターリン主義が、世界的に圧倒的な存在であったことを認めておかなければならない。

全体主義概念は、ナチズムとスターリン主義の「悪」の同類性を想定したが、「理想を目指したにもかかわらず、悪に転化した政治的経験」という内容を象徴するには、スターリン主義という用語がとりあえずは適当である⁽⁴⁾。というのもソ連と社会主義が、時代的にも地域的にもかなりの広がりを持って影響力を及ぼしたことを鑑みると、スターリン主義の問題を中心に考えることに意味があるからである。さらにスターリン主義における政治的暴力を考察すれば、テロリズムのメカニズムや政治的暴力の正当化など現在における重要課題についての解明に生かすことができる。

全体主義概念は、ナチズムとスターリン主義を包含し、その生成から機能まで比較することで、共通点や相違点を洗い出すことになるが、基本的には、共通点が前提となる。そのため、ナチズムの悪の特別さを鑑みると、それをスターリン主義と同列に置くことには多くの異論があり、全体主義論概念は

冷戦期のアメリカの外交政策の産物であるとして、その政治性と有効性が問題視される⁽⁵⁾。しかし、ナチズムとスターリン主義の両者のメカニズムを比較することにより、従来までの独裁体制とは大きく異なる機能や性質、そしてその下での人びとの生活や心理の特徴を浮かび上がらせることにより、歴史の教訓とするという意味では、全体主義概念は有効である。本稿におけるスターリン主義の考察は、この意味での全体主義論概念の扱い方に近いものである。

正義と悪の関係性は、政治思想の中心課題といつてよいが、スターリン主義について、「理想を目指したにもかかわらず、悪に転化した政治的経験」としておくと、「理想 A→悪(幻滅)→理想 B」というような転向問題にもアプローチしやすいことになる⁽⁶⁾。

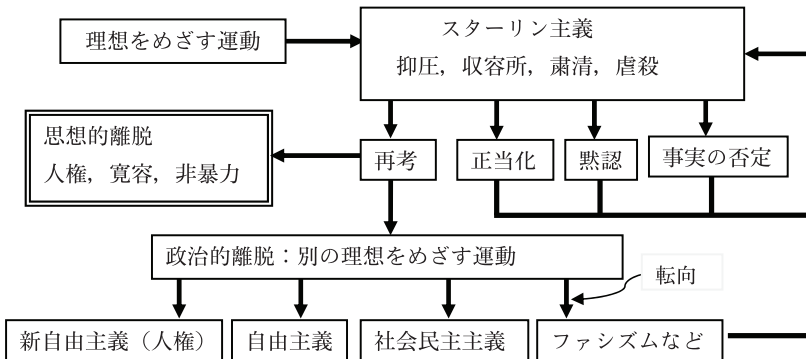


図1 スターリン主義の円環

正義が悪に転化するということは、悪が、正義により正当化されてきたということである。スターリン主義は、革命的暴力や収容所による人権侵害に象徴されるが、いくらそれらの悪の事実が積み重なっても、それだけでは理論や理念によって正当化されるか、正当化されないまでも黙認される。そして、スターリン主義に対する批判が徹底されないと、スターリン主義の円環

から出ることとは困難となる⁽⁷⁾。

スターリン主義の問題点とは、何よりも結果としての人権侵害である。しかし、その悪を断罪する根拠として、人権という理念はほとんど使われることはなかった。スターリン主義からファシズムへの転向は、人権の観点から考えれば全く不当であるが、多くの人びとがその道を辿った。ここでは思想的離脱の目標を「人権・寛容・非暴力」としておいたが、これらの理念を今後どう生かしていくかについての手がかりとしても、スターリン主義の考察は重要である。ここでは、スターリン主義からの思想的離脱の方向性として人権を挙げておいたが、新自由主義による人権の押し付けについては、いわゆる人権帝国主義とみなされ、「一方の極端から他方の極端へ」の移行となり、社会を破壊するという点では共通しているという指摘もある⁽⁸⁾。共産主義者も、新自由主義者も、同じように「善を押しつけようとする計画」をもっており危険である。なぜなら、「仮に善の本性を知っているとすれば、同じ理想を共有しないすべての人々に宣戦布告をしなければならないだろう。ところで、同じ理想を共有しない人々は多数に上るおそれがある」からである⁽⁹⁾。

ここで収容所に象徴されるスターリン主義の悪をどう扱うかについての例として、カミュ＝サルトル論争を題材に考えてみよう。レジスタンスに深くかかわり左翼的立場であったカミュは、「1949年にはもう、ソ連の強制収容所の問題が、レジスタンス出身の左派の作家たちを分裂させていた」という状況のなかで、「いっそう戦闘的で頑固」となり共産党に接近したサルトルとの距離が離れていった。サルトルはスターリンの恐怖政治について批判しながらも、ソ連が資本主義諸国に包囲されていた状況からそれを理解しようとしたのに対し、カミュは「西洋の寛容の伝統と自由な制度の再発見」をすることで、ロシア人によって用いられたとしても、ヒトラー主義のうちに憎み闘ったものについては同じく非難すべきであるとした。

特にソ連の強制収容所について、フランス共産党員たちが「服役の教育的効果を褒めそやし」、メルロ=ポンティやサルトルが、「虐待を認めたが、それが反ソ宣伝に利用されていることを嘆いた」のに対し、カミュは「人間性に対する憎むべき行為であって広く周知させるに値する」とし⁽¹⁰⁾、朝鮮戦争が勃発するなかで『反抗的人間』を執筆する。ヒューズは、このカミュの著作について次のように評する。

英国国民にとっては、その哲学的経験論と常識的推論の伝統があるから、スターリン主義の恐怖と抑圧の赤裸な事実を列挙するだけで十分であつたろう。フランス人にとっては、もっと念入りな一連の推論が要求された。サルトルやその一統は、自分たちの哲学的基盤と自分たちの語彙で答えられることが必要だったのだ。そこで、カミュは、かれの議論を典型的なゴール風（フランス風）で、つまり、デカルト的命題——「わたしは反抗する——故にわれわれは存在する」——をもって始めることを選んだ。抑圧に対する個人的反抗の経験は、「その根源の価値の根拠を全人類におく」と、カミュは論じた⁽¹¹⁾。

カミュは、ナチスの「非合理的恐怖」に対し、共産主義の「合理的恐怖」を批判した。一方、サルトルは、歴史に参加していない傍観者であるカミュを批判し、収容所問題をめぐり論争が起こる。カミュは、サルトルの編集による雑誌でのこの本の書評において「なぜソ連の収容所問題に触れないのか」と批判した。それに対しサルトルは、ソ連の収容所批判は、反共主義者を喜ばせることになり、反資本主義運動や反帝国主義運動のためにならないのであり、左翼が「革命だ！」と言えば、右翼は「じゃ、収容所は？」と切り返すことになるわけで、ソ連において抑圧されている人々を救うためには、自分の陣地で闘うこと、すなわち資本主義体制や植民地支配に抵抗することが

重要だ、とした⁽¹²⁾。

カミュ=サルトル論争は、収容所の事実、すなわちスターリン主義の悪の存在を認めたうえで、それにどう対応するかについての格好の題材だが、それは自国外の人権弾圧にどう対応するか、人類としての悲惨をいかに思想に取り込むか、という問いにもつながる。悪の事実への批判には拠点が必要であり、人権という理念の成熟は、そのひとつである。ある悪を批判する思想が転向することによって、別の悪を正当化する思想への移行にならないためには、悪への批判の根拠である人権の理念の深化が必要となる。

2 スターリン主義の事実と反応

ソ連のスターリン主義の事実、特に収容所や粛清裁判などの政治的弾圧をめぐる論争として、冒頭に触れたカミュ=サルトル論争以外に主だったものだけでも、アナーキズムによるボリシェヴィキの独裁体制批判、社会ファシズム論をめぐる論争、モスクワ裁判をめぐるメルロ=ポンティとアーサー・ケストラーの応酬、アンドレ・ジイドの『ソヴェト紀行修正』をめぐる議論、亡命した秘密警察員のクリヴィツキーをめぐる騒動、独ソ不可侵条約の衝撃、また戦後になり、同じく亡命したクラフチェンコの『私は自由を選んだ』⁽¹³⁾の内容をでっち上げとした批判したフランス共産党に対する名誉毀損裁判⁽¹⁴⁾、シベリア抑留、スターリン批判、中ソ論争、「雪解け」、プラハの春やポーランド『連帯』運動の弾圧などについて、社会主義と自由の問題をめぐる考察がなされた。

本稿では、スターリン主義の悪の事実とそれらへの反応として、①アナーキズムによる独裁批判、②粛清裁判、③収容所について、日本の戦前における革命批判本と、また多くの人々がスターリン主義から思想的に離脱するきっかけとなったとされるソルジェニーツィンの『収容所群島』を参照して、ス

ターリン主義の事実がどう捉えられていたかについて考察する。

① アナーキズムによる独裁批判

ここでの批判の中心は、レーニンの時代であるが、レーニン時代の独裁的手法とそれを支える理論は、スターリン主義の原型ともなっているの、ここではスターリン主義的な政治に対する批判として考える。革命当初からポリシェヴィキ政権の強権政治を厳しく批判していたアナーキストたちにとって、日本における1920年代初めのアナ=ボル論争にもみられるように、クロンシュタットの反乱や労働反対派の弾圧などは、ソ連のポリシェヴィズム政権の非民主性や非寛容の象徴として、よく引き合いに出された。

大杉栄は、クロボトキンを参照しながらロシア革命について、次のように言う。「それを一言で尽せば、ケレンスキーの民主政府を倒した十月革命は、主として「革命は如何にして為されなければならないか」を、僕等に教えた。そしてそれ以来のいわゆるボルシェヴィキ革命の進行は、主として「革命は如何にして為されてはいけぬか」を、僕等に教えた」⁽¹⁵⁾とした。たとえば、戦時共産主義による農村での食糧の徴発については、アナーキストによって次のように描かれる。

全村々が荒らされて、その住民がいなくなってしまった。私は成年の男がまったくいなくなってしまった村々を見た。男はみな銃殺されて、女と14才以下の男の子とだけが残っていた。他の村々では男は一人ずつ鞭打たれて、そしてその年令にはかまわずに、みな強制的に軍隊に入れってしまった。(中略)私は食物徴発のために最後の麦粉までも持って行かれ、また農民等が次の種蒔きの用意に取っておいた種子までも持って行かれた村々を見た。法律で定められた課税以外に、牛や馬も取られ、最後の家禽や毛布もぼろぼろに裂けた枕までも取られて、その村は乾い

た骨のように裸になってしまった。全村々がボリシェヴィキの懲罰隊の砲兵によって、あるいは懲罰のために、あるいは近隣の農民への恐怖的見せしめのために、全滅させられてしまった⁽¹⁶⁾。

またアナーキストが、囚人に対する弾圧について具体的に描写していることにも注目したい。

無政府主義的傾向に対するレーニンの奮闘は実に残忍極まるアジア的退治の方法を取った。昨年9月、多くの同志がモスクワで捕縛された。そしてその月30日に『イズヴェスチヤ』（新報）はこの拘禁された無政府主義者の中の10名が、「強盗として」射殺されたという官報を発表した。その中のだれも、裁判も受けず、取調べさえも受けず、弁護人をつけることも、またその友人や親戚のものと面会することも許されなかった。その死刑になったものの中には、その理想主義と人類のための生涯の献身とがツァーの牢獄と追放との試練を受けしめ、さらになお他の諸国における迫害と苦しみとに堪えしめたところの、二人の有名なロシアの無政府主義者があった。それは数ヶ月以前にリアザンの牢獄から逃げ出したファンニー・パロンと、ツァーの治世の時にその革命的運動のため、多年シベリアの懲治監にあった民衆の講演と文筆の士のレフ・チョルニーとである⁽¹⁷⁾。

当時のアナーキストは、自らの仲間が投獄や銃殺されている情報を進行形として得ることになり、それに対して国際的な抗議運動を展開し、その人道性と個別性は、現代の人権運動に通じるものがある。しかし、後で論じるように、アナーキストによるボリシェヴィキ批判には、党派闘争の側面もあり、またあるべき革命の理念が優先されるので、自らが「反革命」と定めた事象

には、容赦のない態度をとったので普遍性の点で限界がある。

② 革命裁判

革命裁判については、ソルジェニーツィンの『収容所群島』において、「下水道の歴史」（第1部第2章）、「幼児期の法」（同第8章）、「法は成人する」（同第9章）、「法は成熟する」（同第10章）の章で、革命直後の革命裁判からモスクワ裁判へと段階的に発展していった歴史が印象的に示される⁽¹⁸⁾。ソルジェニーツィンは、収容所の歴史を描いた『収容所群島』を当局の厳しい監視をかいくぐって執筆したため、当時の図書館では閲覧できなくなっていた資料について、協力者を得て密かに利用して執筆した⁽¹⁹⁾。ソルジェニーツィンがこれらの章で参照したのは主に、ラツィスの『国内戦線における闘争の二年間』国立出版所（1920年）と当時検事総長であり、1938年には自らも粛清により銃殺されたクルイレンコの『五年間（1918～1922年）：モスクワ裁判所および最高革命裁判所で開かれた最も重要な公判での論告』国立出版所（1922年）である⁽²⁰⁾。

1932年に刊行された平凡社の『ロシア大革命史』の第8巻『反革命運動 ソヴェト裁判記録』でもまた『収容所群島』と同じく「反革命運動」に対する裁判が、クルイレンコ検事の論告を中心に順を追って示されている。この本の内容は、革命批判ではなく「反革命」との戦いの正当化であり、国内に密かに根を張り外国とも結びついたとされる「政治的陰謀」と「経済的攪乱」を引き起こす「反革命団体」を「炙り出す」ことがテーマとなっている。その「訳者序」には、新たな概念による法の適用を辞さないとの調子で、「純粹の政治闘争、経済機構攪乱に対する闘争、個人主義（流職罪）との闘争、商業政策上の闘争など、過去十余年に亘る猛烈なソヴェト革命闘争の真相が、それらの事件によって明らかに知られるであろう」⁽²¹⁾とある。

『反革命運動』における記述は、1918年のはじめの「獄吏ボングリ事件」

からはじまり、それに続く「ルスキエ・ヴェドモスチ（ロシア報知）紙事件」については、「革命裁判所は微細な法律上の蜘蛛巣をはる場所ではない。革命裁判所は、反革命および凡ての反革命的行為に対する政治的闘争の武器である。我々は裁判所に於いて新しい権利を創造する。ブルジョア法制には反革命を裁く規定が無いからである。我々は新しい権利と新しい道徳規範を創造する」⁽²²⁾とされる。続いて紹介されるのは、被告 28 名からなる「タクチチェスキー・ツェントル（戦術センター）事件」であり、文豪トルストイの息女も連座した事件である。「この事件はロシアのインテリゲンツィアの活動に対する」「歴史の裁きであると同時に「革命」の裁きである」⁽²³⁾とされ、「彼等の行為は明らかに「国民の敵」としての行為であり、反革命罪として厳罰に処すべき」⁽²⁴⁾とされた。

次に、1922 年の教会財産の乱暴な徴発に対する抗議に対する弾圧である教会事件⁽²⁵⁾とエスエル党事件が描かれる。ちなみにソルジェニーツィンは『収容所群島』において、後者の裁判についてレーニン全集からレーニンの手紙を引用する。「法廷はテロを排除してはならない。そういうことを約束するのは自己欺瞞ないしは欺瞞であろう、これを原則的に、はっきりと、偽りなしに基礎づけ、法律化しなければならない。できるだけ広く定式化しなければならない。なぜならば革命的正義の観念と革命的良心だけがそれを実際により広くあるいはより狭く適用する諸条件を与えるだろうからである。」そして、これについてのソルジェニーツィンによる「私たちはこの重要文書をあえて注釈しないことにする。この文書には対しては静寂と思索とが似つかわしい」⁽²⁶⁾というコメントは、革命的暴力を論じる際によく引き合いに出される。

サヴィンコフ事件（1924 年）では、世界的に著名なアナーキストであったサヴィンコフに自己批判を言わしめたという点で、ブハーリンらに対するモスクワ裁判を先取りしていた。サヴィンコフは、ロシアの民衆が自分たち

の党派ではなく共産党に味方したとして、裁判で次のように発言した。

故に余は繰返して云おう。ロシアの民衆の態度はたとえよくとも悪くとも、誤っていてもいなくても、ロシア人たる余はそれに従うのみであると⁽²⁷⁾。

余は初めて自ら自分に返答した。「然り。余は誤っていた。共産党は政権の略奪者ではない。彼等はロシアの民衆は国内闘争に於いて彼等を支持し、我々に対する闘争に於いて彼等を支持した。どうも仕方がない。民衆には従わねばならぬ⁽²⁸⁾。

また『反革命運動』では、引き続きシャフトゥイ事件（1928年）、産業党事件（1930年）の様子が描かれる。クルイレンコは論告で次のように言う。「十日間に亘る本件の公判は、異常な環境のうちに行われた。公判開始の頭初から、わが連邦の労働階級は、全国の主なる都市の街頭において、本件の被告の行為を非難する大衆示威運動を行った」⁽²⁹⁾。「ソヴェト連邦の労働階級のみでなく、西ヨーロッパの労働大衆、並びにブルジョア階級も、同様の緊張をもってこの法廷に響く一言一句に耳を傾けた」⁽³⁰⁾とし、反革命的テロを共謀する大掛かりな組織的舞台がでっちあげられる。

ソルジェニーツィンは、この裁判については次のようにコメントした。「いや、今や問題なのはサボタージュではなく、もっとひどい——妨害行為なのである（この言葉は、たぶん、シャフトゥイ裁判の平取調官によって発見されたようだ）。何を捜し出さねばならぬかということがはっきりするや否や、この妨害行為は、これまで人類史上かつて存在したことがなかった概念であるにもかかわらず、あらゆる工業部門で、またすべての生産現場で難なく暴露されだしたのである」（強調原文）⁽³¹⁾。ここで重要なのは、「失敗」

の原因を「妨害」に、それも「敵」の「妨害」、さらには「組織的な敵」の「妨害」、そして「外国の勢力と結びついた組織的な敵」の「妨害」に転嫁する術を編み出していったことである。しかもその敵は、「階級の敵」であり、「人民の敵」とされる。

ソルジェニーツィンはさらに「国家におけるすべての欠乏は、飢餓も寒冷も衣類不足も混乱も明らかな愚行も——そのいっさいが技師の妨害分子に転嫁された」として裁判の目的はすべて達せられたとした⁽³²⁾。これにより知識人（インテリゲンチヤ）である技師の「陰謀」は、「常に正しい」支配者階級である労働者によって粉砕されたことになる⁽³³⁾。

1936年に時事新報社から出版された同社外報部編の『赤露の戦慄 反革命陰謀公判記録』は、*The Case of the Trotskyite Zinovievite Terrorist Centre* (Moscow, 1936) の日本訳であるが、そこではスターリン主義における「大敵」であるトロツキーがナチズムと共謀したとされ、「本書はソヴィエト・ロシアを中心として、革命と反革命の集団が世界を舞台にして暗躍した結果、遂に政府側が勝利を得たという勝利の文であり、社会政治史の一ページからは永遠に抹殺しようとしても抹殺し得ない国際的意義のある報告書である」とある。このように人民の敵は、反ブルジョアと反ファシズムという強力な正義に対する完璧な敵とされていく。

③ 収容所

先にカミュ＝サルトル論争でみたように、収容所の事実がソ連の国外でどう扱われ、評価されてきたかは、スターリン主義の悪がどう対応されてきたを見る試金石である。アナーキストやカトリックなどは、組織的にこの非道を繰り返して告発し、ソビエト政権の初期段階での監獄や収容所体制について詳細に描いている。またヨハネス・ラウレス『ロシアに於ける共産主義と其実相』（1932年）は、『収容所群島』の「群島は海から浮び上がる」（第3部

第 2 章)⁽³⁴⁾ で克明に描かれた最初の収容所といわれるソロヴェツキー島（ソロフキ）⁽³⁵⁾ をはじめとして収容所の実態について報告し、カトリック教聖職者で弾圧された人名のリストも掲載されている⁽³⁶⁾。

今日入手し得る情報は、大部分、労農連邦に於ける囚人収容所から、辛うじて脱出したロシア人の報告である。而して此の種目撃者中には、農民、司祭、技師、労農官憲、更に甚しきは元の特別警察所^{チ・ェ・ベ・ウー}属密偵等各種の社会階級を網羅して居る。その他の報道は、労農貨物と世界市場の諸中心地に運送する為、ロシアの港湾に寄港した船舶の船員並に船長等から出たものである⁽³⁷⁾。

ロシアに於ける強制労働者の数字は莫大なもので、北部諸地方に於いてだけでも数十万に上ることは明白である。これ合同保安局^{ゲ・ベ・ウー}の公報の確認する所で、右の報告に拠れば、1930 年 5 月 1 日現在に於ける労農連邦内の囚人総数は、66 万 2 千、内男子 57 万、婦人 7 万 4 千で、1 万 8 千は 13 才から 18 才迄の少年少女である。此の詳細な数字を発表したのは、共産主義者から免黜され、1931 年 1 月 1 日フィンランドに脱出した合同保安局^{ゲ・ベ・ウー}の有力な一員である⁽³⁸⁾。

更に労農連邦に於ける囚人は、国家公安局の銃と銃剣との下に働いて居る事実を記憶せねばならぬ。これは単に象徴的意義の形容ではない。何人でも働くことを拒む者は惨々打擲され、若し頑強に労働を拒否すれば、銃殺さえされるのである。然も働くことの出来ぬ囚人は、食糧半減の憂き目に遭わされる以上、餓死せざらん為に、是非とも労働せねばならぬ訳である⁽³⁹⁾。

移住者や亡命者を通じて、また戦後は日本の抑留者も含めた捕虜たちにより、収容所の存在とその悲惨さが繰り返し告発されてきた。このような事実は積み重なっていたにもかかわらず、収容所体制の総体的な考察と理解の始まりはソルジェニーツィンの『収容所群島』を待たなければならなかった。

3 正当化の方法

スターリン主義の悪の事実が革命当初から断続的に報告され、積み重なっていても、スターリン体制は、その悪の正当化に成功してしまう。その正当化の理由は、何よりもまず、社会主義国家ソ連が、資本主義の矛盾、すなわち貧困問題などの社会問題を解決し、理想を実現したとされた国であるということによるもので、スターリン体制はまさに反資本主義という理念を體現したとされていた。

われわれが嘗つて夢みたもの、逡いながらも微かに希ったもの、しかもわれわれの意志や力がそれをめざして辿っていたところのもの、それをソヴェトが実現したのである。云わば、われわれのユートピアが現実のものとなりつつある国がソヴェトであったのだ。(中略)そしてわれわれは、すべての悩める民衆の名において、ソヴェトとともに契った誓約の真ただ中に欣然としてつき進んで行ったのである⁽⁴⁰⁾。

当初、プロレタリア革命への信仰は、世界各地の「知識人、裕福な家庭の子息、さらに資本家の心をも捉え」、「偉大な平和主義者ロマン・ロラン」や「20年代の逸脱者たるシュールリアリストたちのような少数の周辺の人間を除けば、世界中で知識人にはあまり衝撃を与えなかった」が、その後、資本主義国が大恐慌に陥っている時、スターリン体制が五カ年計画で急速な工

業化に成功し、「スターリン信仰」が広まり、「その時、反ファシズムを経由した大規模な回心の動きが労働者，サラリーマン，ブルジョア，知識人（小学校教師からきわめて著名な作家に至るまで）を現代の大宗教に導いた。モスクワ裁判はこの新たな〈信仰〉のなかにいくらかの亀裂を生じさせ」たが、「その亀裂および幻滅の影響力はおどろくほど弱いものであった」⁽⁴¹⁾。

先に述べたアナーキストによるボリシェヴィキの弾圧批判も、あるべきロシア革命のために主張され、そこでは革命的暴力は肯定される。「革命的独裁は、無政府主義の理論家や運動者が常に必要だと認めてきたところの、力や暴力を用いる一形式である。いかなる革命家もブルジョア社会がお説法で参るだろうとは思っていない」⁽⁴²⁾。「そこで無政府主義者の要することは、ただ、敵の力を倒壊するという仕事が終わったら、独裁は止めなければならないということだ」⁽⁴³⁾。ここでも、自らの陣営に味方する革命的党派だけに自由が求められている。ロシア革命に反する勢力に組することには抵抗し、反革命と言うレッテルを貼られるのを恐れ、革命についての自らの理念が絶対的な基準になる。激しいボリシェヴィズム批判をした大杉栄も当初は次のように述べていた。

ボリシェヴィキ政府に対する批評！ 僕はそれを随分長い間遠慮していた。僕ばかりではない。世界の無政府主義者の大半はそうだった。また、革命の最初にはみずから進んで共産主義者等の協同戦線に立ったものは少くはなかった。ロシアの無政府主義者等は、ほとんど皆そうだと言ってよかろう。ロシア以外の国での無政府主義者等は、一つにはロシアの真相がよくわからなかった。そしてもう一つには、実際反革命がいやだった。そして彼等は十分な同情をもって、ロシア革命の進行をみていたのだ⁽⁴⁴⁾。

大杉栄の「ロシアに於ける無政府主義者」におけるボリシェヴィキ批判に対して、山川菊栄は、ボリシェヴィキを支持する立場でソ連の収容所や監獄の体制を擁護する。山川は多くの外国人特派員や調査団によってボリシェヴィキの監獄がいかに「人道的」であるかの証拠が示されたとしつつ、大杉栄を批判した。

それをよいことにして、各国に亡命しているブルジョア共は、途方もない虚報を伝播するのに夢中で、外国政府から私かに資金の供給まで受けて、反革命的宣伝の団体や出版機関まで設けて活躍している。が吾々はロシアの無産階級の弁明を一々聞くことが出来ぬからとて、そういう見えすいた中傷を真に受けるまで、他国の兄弟に対して無理解であってはならない。彼等も人間である。殊には全然前人未踏の境地に進み入る無経験な先駆者の常として、多少の遣り損いも、算盤玉の弾き違いも、絶対にはないとはいわれない。けれども恥づべき無力のために、彼等の事業に一臂の力をも藉すことの出来ぬ吾々として、餓え且つ傷つきながら孤独で、必死の戦いを闘っているロシアの兄弟に対して、その多少の過ち——もしあったとして——を責める資格があるだろうか⁽⁴⁵⁾。

そして、労農政府は、「社会革命党员やアナーキストは愚か、共産党员でも、戦線で軍紀を遵守しなかったり、反革命的行動ある者は銃殺している。共産党员ならば一層厳罰を以て臨まれる」としている⁽⁴⁶⁾。悲惨な事実を批判することに対するこのような逡巡は、ソ連が存続している間、常に繰返されてきた。ソ連の収容所に象徴されるスターリン主義の悪は、資本主義批判や帝国主義批判という立場から擁護され、さらに平和の維持、内政不干渉、他国への無関心によって補強された。そして、何よりも、内部にも敵やスパイの脅威が高まっているという状況で、革命による内戦状態であるからとして、

報復感情や緊張のなかでテロリズムが正当化されることになる。

「が、赤色恐怖は！？」或る者は云うであろう。が、それはずっと後の事、連合軍がロシアに侵入し、帝政派や黒色党が其の庇護の下に労働者や農民に対して白色恐怖政治を行わんとし、罪もない女子供を片端しから虐殺した時に始めて行われたものなのである。

其時には、既に絶望的になった労働者達は革命の赤色恐怖を以て彼等に対抗しなければならなかった。死刑は復活し、白軍の一味は続々と彼等の手に捕われて行った。(中略) 赤色恐怖は明らかに革命よりも後期の事実である。其れは反革命軍の白色恐怖に対する寧ろ受動的なる応答であった⁽⁴⁷⁾。

また資本主義の自滅は必然であるとみなすことで、古い道徳や宗教など「遅れた封建的」慣習を変革するための進歩という正義による正当化もあった。さらに正当化に使われた強力な理念としては反ファシズムがある。反資本主義としてのスターリン主義は、反資本主義としてのファシズムに転向しやすい一方で、反ファシズム(平和)としてのスターリン主義は、ファシズム(戦争)への転向はなされにくい。戦後になると、スターリン主義は、反資本主義という理念よりむしろ、反帝国主義や反植民地主義という理念により平和運動と結びつき、ソ連による「平和のための闘争」が国際的な階級闘争という文脈で正当化されることになる。

4 スターリン主義批判本と人権 ― 普遍性への模索

この年表は、ロシア革命やソ連を批判的に論述した本を中心に、亡命者による告発本から学術書まで幅広いジャンルについて論争的な本を中心として

表1 スターリン主義批判本と人権本 () 年原書出版年

1919	バーカー（栗屋関一訳）『社会主義批判論』（原題：英国社会主義）法曹閣書院（1908） 室伏高信『社会主義批判』批評社
1920	（中目尚義訳述）『過激派の本領』大鐙閣 グード（来原慶助訳補）『レーニンの天下：ボルシェヴィズムの正体』広文館（1920） スパルゴー（浅野護訳）『過激主義の心理』日本評論社（1919） ボーリュウ（宮地武夫訳）『非共産主義』佐藤出版部（原題：コレクティヴィズム）（1908）
1921	エリセーエフ『赤露の人質日記』朝日新聞社 クープリン（世界思潮研究会訳）『労農露国の真相』日本評論社 メンゲンデン（高瀬毅訳）『過激派の獄中より』日本評論社出版部（1919） ラッセル（前田河広一郎訳）『ポリシェビーキの理論と実際』三田書房（1920）
1922	大杉栄『無政府主義者の見たロシア革命』叢文閣 田所照明『革命ロシア研究十講』酒井書店 福田徳三『ポリシェヴィズム研究』改造社
1925	スノーデン氏夫人（浜野修訳）『労農露西亜を通りて』一人社（1920）
1926	シンコヴィッチ（神永文三訳）『マルキシズムの崩壊』新潮社（1913） 久保田栄吉『赤露二年の獄中生活』矢口書店
1929	ドレイサア（下山鎌吉訳）『ドレイサアの見たソヴィエト・ロシア』文明協会（1928） ミリュコフ（大竹博吉訳纂）『労農革命の真相：ポリシェヴィキ独裁政治の時代』ロシア問題研究所（1927） 綾川武治『共産党運動の真相と毒悪性』全日本興国同志会出版部 来原慶助『赤禍 共産主義真相』厳松堂 高島素之『批判マルクス主義』日本評論社 藤澤親雄『共産主義排撃の根拠』タイムス出版社
1930	夏秋亀一『赤露の秘密』万里閣
1931	バヂヤノフ（姫田嘉男訳）『赤露の皇帝スターリン』先進社（1931） ベルクマン（塚本小太郎訳）『ロシア革命の秘密』欧亜社（1925） 高田保馬ほか，思想問題研究会編『マルクス主義批判』社会教育会
1932	ラウレス『ロシアに於ける共産主義と其实相』カトリック思想・科学研究所 『反革命運動 ソヴェト裁判記録』ロシア大革命史，第8巻，平凡社

1934	勝野金政『ソ連邦脱出記：入党から転向まで』日露通信社出版部
1936	(時事新報外報部)『赤露の戦慄：反革命陰謀公判記録』時事新報社 (1936)
1937	ジイド (堀口大学訳)『ソヴェト紀行修正』第一書房 (1937) トロツキー (荒畑寒村訳)『裏切られた革命：ソヴィエト同盟とは何ぞやそれは何処へ往くか』改造社 (1936)
1938	クリヴィツキー (三宅邦男訳)『ソ連の暗黒面：クレムリンの謎を解く』今日の問題社 (1938)
1939	ソロネヴィッチ (麻上俊夫訳)『繋がれたロシア』三笠書房 (1938)
1941	イヴォン (延島英一訳)『スターリン治下のソ連邦』岡倉書房 (1936)
1947	ディール (中島時雄訳)『無産階級独裁批判』真光社 (1920)
1948	アルペ『共産主義の実相』ドン・ボスコ社 クラフチェンコ (井村亮之介訳)『私は自由を選んだ』ダヴィッド社 (1946)
1949	ダーリン (直井武夫訳)『真実のソ連』法政大学出版局 (1947) ナルヴィグ (小沼丹, 藤井継男訳)『鉄のカーテンの裏』読売新聞社 (1946) バルミン (佐藤亮一訳)『私は何故ソ連を逃げたか：生き残った人々の記録』逍遙書院 (1945) 小泉信三『共産主義批判の常識』新潮社 田邊忠男『共産主義理論の批判』協友社 労働文化社編『マルクスズムに対決するもの：批判と反批判』労働文化社 蠟山政道『「共産党宣言」批判』明治書院
1950	オーウェル (吉田健一, 龍口直太郎訳)『1984』文芸春秋新社 (1949) クロスマン編 (村上芳雄, 鏈田研一訳)『神は蹟く』青溪書院 (1949) ケストラー (岡本成蹊訳)『真昼の暗黒』筑摩書房 (1940) ケルゼン (矢部貞治訳)『ボルシェヴィズムの政治学的批判』労働文化社 (1948) フィッシャー編 (直井武夫訳)『祖国を追はれた十三人：ソヴィエト人の見たソヴィエト社会』改造社 (1949) 共産主義批判研究会編『共産主義批判全書』天満社 対馬忠行『スターリン主義批判』(アテネ文庫) 弘文堂 平井新『共産主義の理論と批判』渡邊書房 「マルクスとたたかう代表的学説・十五講：その系譜・要点と学び方」『自由国民』, 29 特別号, 自由国民社
1951	シュムベーター (中山伊知郎, 東畑精一訳)『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社 (1942) バーナム (長崎惣之助訳)『経営者革命』東洋経済新報社 (1941) 林達夫『共産主義の人間』月曜書房

スターリン主義批判本と人権

1953	ジャンソンほか（佐藤朔訳編）『革命か反抗か：カミュ・サルトル論争』新潮社（1952） マンハイム（樺俊雄訳）『イデオロギーとユートピア』創元社（1929） ワイスベルク（荒畑寒村訳）『被告：ソヴィエト大粛清の内幕』早川書房（1952）
1954	ハイエク（一谷藤一郎訳）『隷従への道：社会主義と自由』創元社（1944） ハーリング（花崎淳訳）『死の収容所』創美社（1951） ベック、ゴディン（小野武雄訳）『粛清の歴史』国際文化協会（1951）
1955	イーストマン（小島竜一訳）『自由を侵害する社会主義：偽妄の一世紀についての省察』日刊労働通信社（1955）
1956	カミュ（佐藤朔、白井浩司訳）『反抗の人間』新潮社（1951） トロツキー（山西英一訳）『スターリンの暗黒裁判』東洋経済新報社（1950） ヤーコヴレフ（公安調査庁訳）『ソ連における政治犯取締政策と強制収容所の実体』公安調査庁（1955） リッパ（木島ひろ子訳）『ラーゲルの女』国際文化研究所（1951） 丸山眞男『現代政治の思想と行動』未来社
1957	アルチェミエフ（公安調査庁訳）『ソ連の矯正労働収容所の実情と警備組織』公安調査庁（1956） ジラス（原子林二郎訳）『新しい階級：共産主義制度の分析』時事通信社（1957） ブルゼジンスキー（皆藤幸蔵訳）『ソヴェト全体主義と粛清』時事通信社（1956）
1958	ウェーユ（石川湧訳）『抑圧と自由』東京創元社（1955） 弥益五郎『ソ連政治犯収容所の大暴動：カラガンダ事件の体験記』日刊労働通信社
1959	メルロ=ポンティ（森本和夫訳）『ヒューマニズムとテロル：共産主義政治の倫理』現代思潮社（1947） 史料調査会編著『スターリン独裁と大粛清』ロシア大革命史，第9巻，ロシア大革命史刊行会
1961	ウィットフォーゲル（アジア経済研究所訳）『東洋的専制主義：全体主義権力の比較研究』論争社（1957） 猪木正道『独裁の政治思想』創文社 前野茂『生ける屍：ソ連獄窓十一年の記録』春秋社
1963	インケルス（生田正輝訳）『ソヴェトの市民：全体主義社会における日常生活』慶応義塾大学法学研究会（1959） コシイク（小穴毅訳）『ソ連の強制収容所』自由アジア社（1962） 勝部元編『スターリン主義の解剖』合同出版社

1964	タルモン（市川泰治郎訳）『フランス革命と左翼全体主義の源流』拓殖大学海外事情研究所（1952） ダーレンドルフ（富永健一訳）『産業社会における階級および階級闘争』ダイヤモンド社（1957） 三浦つとむ『レーニンから疑え』芳賀書店
1966	ヴォーリン（野田茂徳，野田千香子訳）『知られざる革命：クロンシュタット反乱とマフノ運動』現代思潮社（1947） 勝田吉太郎『革命とインテリゲンツィヤ』筑摩書房 菊地昌典『歴史としてのスターリン時代』盛田書店
1967	ダニエルズ（国際社会主義運動研究会訳）『ロシア共産党党内闘争史』（原題：革命の良心）現代思潮社〔1960〕 内村剛介『生き急ぐ：スターリン獄の日本人』三省堂 津田道夫『国家論の復権：政治構造としてのスターリニズムの解明』盛田書店
1968	<u>東京大学社会科学研究所編『基本的人権』第3巻，歴史Ⅱ，東京大学出版会</u> 吉本隆明『共同幻想論』河出書房新社
1969	<u>サハロフ（上甲太郎，大塚寿一訳）『進歩・平和共存および知的自由』み</u> <u>みすず書房（1968）</u> ベル（岡田直之訳）『イデオロギーの終焉：1950年代における政治思想の涸渇について』東京創元新社（1960） ライオンズ（小穴毅訳）『ソビエトの神話と現実：共産主義50年のバランス・シート』自由アジア社（1967）
1970	アマルリク（原子林二郎訳）『ソ連は1984年まで生きのびるか？』時事通信社（1969） アロン（小谷秀二郎訳）『知識人とマルキシズム』（原題：知識人の阿片）荒地出版社（1955） セルジュ（山路昭訳）『母なるロシアを求めて』現代思潮社（1951） ニコラエフスキー（中村平八，南塚信吾訳）『権力とソヴェト・エリート』みすず書房（1965） 溪内謙『スターリン政治体制の成立』第1部，「農村における危機」，岩波書店 <u>松田道雄『革命と市民的自由』筑摩書房</u>
1971	林道義『スターリニズムの歴史的根源』御茶の水書房 湯浅赳男『スターリニズム生成の構造』三一書房
1972	アーレント（大久保和郎，大島かおり訳）『全体主義の起原』みすず書房（1951） ソ連邦司法人民委員部，トロツキー編著（鈴木英夫ほか訳）『ブハーリン裁判』鹿砦社（1938）

1973	<p>マルチェンコ（梶浦智吉訳）『わたしの供述』勁草書房（1967）</p> <p>メドヴェージェフ（石堂清倫訳）『共産主義とは何か』（原題：『歴史の審判』）三一書房（1968）</p> <p>ヤキール（中田甫訳）『ラーゲリの少年時代』平凡社（1972）</p> <p><u>内村剛介編『スターリン時代』平凡社</u></p>
1974	<p>ギンズブルグ（中田甫訳）『明るい夜暗い昼』平凡社（1967）</p> <p><u>ソルジェニーツィン（木村浩訳）『収容所群島：1918-1956：文学的考察』新潮社（1973）</u></p> <p><u>正垣親一編訳『地下ロシアの声 ソ連反対派知識人運動ドキュメント』</u> <u>（原題：サミズダート：ソヴェト反対派の声）柘植書房（1974）</u></p> <p>武藤光朗『左翼全体主義：その理論と実態』民主社会主義研究会</p>
1975	<p>ドルガン（工藤幸雄訳）『収容所群島のアメリカ人』三笠書房（1975）</p> <p>坂間文子『雪原にひとり囚われて：シベリア抑留10年の記録』講談社</p> <p>立花隆『中核 VS 革マル』講談社</p>
1976	<p>コンクエスト（片山さとし訳）『スターリンの恐怖政治』三一書房（1968）</p> <p>モラン（宇波彰訳）『自己批評：スターリニズムと知識人』法政大学出版局（1958）</p> <p><u>石堂清倫ほか編『ソヴェト反体制：地下秘密出版のコピー』三一書房（1975）</u></p>
1977	<p><u>アムネスティ・インターナショナル編（木村明生、長井康平訳）『ソ連における良心の囚人：アムスティ・インターナショナル報告書』朝日新聞社（1975）</u></p> <p>シャピロ（河合秀和訳）『全体主義』福村出版（1972）</p> <p>ドゥチケ、ヴィルケ編（石堂清倫訳）『社会主義の条件』（原題：『ソ連・ソルジェニーツィンおよび西の左翼』）三一書房（1975）</p>
1978	<p><u>ロイ・メドヴェージェフ（佐藤紘毅訳）『ソ連における少数意見』岩波書店（1977）</u></p> <p>レヴィ（西永良成訳）『人間の顔をした野蛮』早川書房（1977）</p>
1979	<p>志水速雄『日本人はなぜソ連が嫌いか』山手書房</p> <p><u>谷川良一『ソ連邦新憲法と基本的人権：スターリン憲法からブレジネフ憲法』有斐閣</u></p> <p>若槻泰雄『シベリア捕虜収容所：ソ連と日本人』サイマル出版会</p>
1980	<p>ブツァ（柴田寛二他訳）『ボルクタ収容所：ラーゲルとアウシュヴィッツのあいだ』評論社（1976）</p> <p>ポパー（内田詔夫、小河原誠訳）『開かれた社会とその敵』未来社（1945）</p> <p>ナジェージュダ・マンデリシュターム（木村浩、川崎隆司訳）『流刑の詩人・マンデリシュターム』（原題：『希望に抗う希望』）新潮社（1970）</p> <p>小室直樹『ソビエト帝国の崩壊：瀕死のクマが世界であがく』光文社</p>

1981	<p>ヴォスレンスキー（佐久間穆，船戸満之訳）『ノーマンクラツラ：ソヴィエトの赤い貴族』中央公論社（1980）</p> <p>カレール=ダンコース（高橋武智訳）『崩壊した帝国：ソ連における諸民族の反乱』新評論（1978）</p> <p>グリュックスマン（田村俣訳）『現代ヨーロッパの崩壊』（原題：『料理女と人食い』）新潮社（1975）</p> <p><u>シュパラー（藤田幸久訳）『ソ連の反体制派たち：私が見た人権闘争』サイマル出版会（1979）</u></p> <p>ディヴィス（荒田洋，奥田央訳）『社会主義的攻勢：ソヴェト農業集団化1929-1930』御茶の水書房（1980）</p> <p>ルヴェル（岩崎力，西永良成訳）『全体主義の誘惑』新潮社（1976）</p> <p>斎藤六郎『シベリア捕虜志：その真因と全抑協運動』波書房</p>
1982	<p>ブザンソン（篠原義近訳）『幽霊の解剖：ソヴィエト社会主義の政治経済学』新評論（1981）</p> <p><u>マモーノヴァほか編（片岡みい子訳）『女性とロシア：ソ連の女性解放運動』亜紀書房（1981）</u></p>
1983	<p><u>ブロック，レダウェイ（秋元波留夫，加藤一夫，正垣親一訳）『政治と精神医学：ソヴェトの場合』みすず書房（1977）</u></p> <p>ボッフア（坂井信義訳）『スターリン主義とはなにか』大月書店（1982）</p> <p>戸田徹『マルクス葬送』五月社</p> <p><u>吉川元『ソ連反体制運動の展開：ソ連人権問題の国際化』広島修道大学総合研究所</u></p>
1984	<p>笠井潔『テロルの現象学：観念批判論序説』作品社</p> <p><u>藤田勇編『社会主義と自由権：ソ連における自由権法制の研究』法律文化社</u></p>
1985	<p>ドイッチャー（大島かおり，菊地昌典訳）『大粛清・スターリン神話』ティビーエス・ブリタニカ（1957，1965）</p> <p>ハウ（蔭山宏ほか訳）『世紀末の診断：1984年以後の世界』（1983）</p>
1987	<p>ベトレーム（高橋武智ほか訳）『ソ連の階級闘争』第三書館（1974）</p> <p>「収容所社会ソ連に生きる：ナマの声で綴る，いまロシア人であることの悲劇」『別冊宝島』60，JICC出版</p>
1990	<p>カストリアディス（江口幹訳）『社会主義か野蛮か』法政大学出版局（1949-1979）</p> <p>ローゼンバーグ（荒このみ訳）『ソヴィエト流浪：ある知識人女性の回想』岩波書店（1988）</p> <p>高杉一郎『スターリン体験』岩波書店</p>

スターリン主義批判本と人権

1991	<p>ミーゼス（村田稔雄訳）『ヒューマンアクション 人間行為の経済学』春秋社（1949）</p> <p>ラトウシンスカヤ（矢田雅子，片岡みい子訳）『強制収容所へようこそ』（原題：灰色は希望の色）晶文社（1988）</p> <p>ルフォール（宇京頼三訳）『余分な人間：『収容所群島』をめぐる考察』未来社（1980）</p>
1992	<p>トドロフ（宇京頼三訳）『極限に面して：強制収容所考』法政大学出版局（1991）</p>
1993	<p>ラーパポート（駐文館編集部訳）『医師団陰謀事件：ユダヤ人大量虐殺』駐文館（1990）</p> <p>原暉之『インディギルカ号の悲劇：1930年代のロシア極東』筑摩書房</p>
1994	<p>加藤哲郎『モスクワで粛清された日本人：30年代共産党と国崎定洞・山本懸蔵の悲劇』青木書店</p> <p>塩川伸明『ソ連とは何だったか』勁草書房</p>
1995	<p>リンス（睦月規子ほか訳）『全体主義体制と権威主義体制』法律文化社（1975）</p>
1996	<p>ロッシ（梶浦智吉，麻田恭一訳）『ラーゲリ（強制収容所）註解事典』恵雅堂出版（1987）</p>
1997	<p>梶川伸一『飢餓の革命：ロシア十年革命と農民』名古屋大学出版会</p>
1998	<p>フレヴニューク（富田武訳）『スターリンの大テロル：恐怖政治のメカニズムと抵抗の諸相』岩波書店（1997）</p>
1999	<p>クズネツォフ（岡田安彦訳）『シベリアの日本人捕虜たち：ロシア側から見たラーゲリの虚と実』集英社（1997）</p> <p>シャラーモフ（高木美菜子訳）『極北コルィマ物語』朝日新聞社（1978）</p>
2001	<p>カルポフ（長勢了治訳）『スターリンの捕虜たち：シベリア抑留：ソ連機密資料が語る全容』北海道新聞社（1997）</p> <p>クルトワ，ヴェルト（外川継男訳）『共産主義黒書：犯罪・テロル・抑圧』恵雅堂出版（1997）</p> <p>ゲッティほか編（川上洸，萩原直訳）『大粛清への道：ソ連極秘資料集：スターリンとポリシェヴィキの自壊 1932-1939年』大月書店（1999）</p> <p>内田義雄『聖地ソロフキの悲劇：ラーゲリの知られざる歴史をたどる』日本放送出版協会</p>

2003	アガンベン（高桑和巳訳）『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』以文社（1995） 小沼堅司『ユートピアの鎖：全体主義の歴史経験』成文社 <u>宮脇昇『CSCE 人権レジームの研究：「ヘルシンキ宣言」は冷戦を終わらせた』国際書院</u>
2004	ギル（内田健二訳）『スターリニズム』岩波書店（1990）
2006	アプルボーム（川上洸訳）『グラウグ：ソ連集中収容所の歴史』白水社（2003）
2007	フュレ（楠瀬正浩訳）『幻想の過去：20世紀の全体主義』バジリコ（1995） 村山常雄編著『シベリアに逝きし人々を刻す：ソ連抑留中死亡者名簿』村山常雄
2008	ブーバー=ノイマン（林晶訳）『スターリンとヒットラーの軛（くびき）のもとで：二つの全体主義』ミネルヴァ書房（1948） ポリャーン（長勢了治訳）『二つの独裁の犠牲者：ヒトラーとスターリンの思うままに迫害された…数百万人の過酷な運命』（2002）
2009	ジョン・デュイ調査委員会編著（梓澤登訳）『トロツキーは無罪だ!：モスクワ裁判〔検証の記録〕』現代書館（1938）
2010	メリグーノフ（梶川伸一訳）『ソヴェト=ロシアにおける赤色テロル（1918-23）：レーニン時代の弾圧システム』社会評論社（1924）
2011	ファイジズ（染谷徹訳）『囁きと密告：スターリン時代の家族の歴史』白水社（2007）
2012	ネイマーク（根岸隆夫訳）『スターリンのジェノサイド』みすず書房（2010）
2013	シニャフスキー（沼野充義ほか訳）『ソヴィエト文明の基礎』みすず書房（1988） トッド（石崎晴己監訳，石崎晴己，中野茂訳）『最後の転落：ソ連崩壊のシナリオ』藤原書店（1976）
2014	松井康浩『スターリニズムの経験：市民の手紙・日記・回想録から』岩波書店
2015	スナイダー（布施由紀子訳）『ブラッドランド：ヒトラーとスターリン大虐殺の真実』筑摩書房（2010）
2016	富田武『シベリア抑留：スターリン独裁下，「収容所群島」の実像』中央公論新社 和田春樹『スターリン批判 1953～56年：一人の独裁者の死が，いかに20世紀世界を揺り動かしたか』作品社
2017	富田武，長勢了治編『シベリア抑留関係資料集成』みすず書房

取り上げ、原則一人の著者につき一冊とし、中国や東欧などロシア以外の社会主義国についての書籍はここでは除いている⁽⁴⁸⁾。ここにある本の多くは、社会主義、ソ連、そして革命を否定する「反共的」言説にせよ、あるべき社会主義や革命、そしてソ連における革命や改革を目指す言説にせよ、収容所をはじめとするスターリン主義的な弾圧の事実を批判し、事実に基づく考察がなされている。そのなかで悲惨な立場により区別するのではなく、普遍化する方向性を持った人権の言説が現れてきた。この年表では、人権の視点で書かれているとみなされるものについて太字下線で示した。ここで言う人権の視点とは、ソ連の人権概念や人権運動を扱う学者やジャーナリストに加え、弾圧された人びとや亡命者の手記や記録のうち、著者が人権を意識していることを意味する。

ソ連国内の「反体制運動」が1960年代終わりから人権運動としての形をとりつつあったのに対して⁽⁴⁹⁾、日本での取り上げ方は、あるべき真の社会主義や革命を目指す左翼の「反対派」として扱ったものが多い。研究書を除くと、人権そのものの視点で書かれている代表例は、1977年のアムネスティ・インターナショナルによる『ソ連における良心の囚人』である。よく言われているように、国際的に人権の時代とされるのは、1970年後半からである⁽⁵⁰⁾。その時期には、国際人権規約（1966年採択、1976年発効）、全欧州安全保障会議（CSCE）のヘルシンキ会議（1975）、人権外交のカーター政権（1977～）、アムネスティ・インターナショナルのノーベル賞受賞（1977）などがある。ハンチントンが提示した、南欧からはじまりラテンアメリカ、アジア、ソ連東欧、アフリカ、中東と続く民主化の「第三の波」の開始もこの時期である⁽⁵¹⁾。しかし、この動きを準備した時代は1960年代である。それは、アメリカの公民権運動、ベトナム反戦、パリなどの学生運動、プラハの春など世界的な社会運動の高揚の時期にあたり、社会変革や革命の勢いのなかでも大きな善を目指すのではなく、個別具体的な社会問題の解決への要求

と取組みがなされ、人権の息吹きが始まったといえる。人権の視点であるか否かは、悲慘の普遍化がなされているかどうかが問題になる。アナーキストやトロツキストも、自らの党派に対する悲慘については、真摯に伝え批判したが、自らに敵対する党派、さらには自らが反革命的とみなした人々の悲慘については軽視し、弾圧を正当化していた。

自らの理念や理論にもとづく「敵」、そして自らの体制の「敵」に対する弾圧についても正当化せず、その「敵」を擁護するというのは、実はそれほど簡単なことではない。民主主義国でも死刑の是非については、議論が続いていることにみられるように、人権の理念には、「悪」の擁護、「悪人」の人権の擁護、そして「敵」の擁護が含まれている。アムネスティなどの人権団体が、言論の自由など自由権を核心としながら普遍的に擁護されるべき人権を提示し、それらを擁護することの普遍性を訴えても、文化や国家の壁につきあたれば、普遍的な価値が相対化され、その文化や国家に対する「悪」や「敵」にされてしまう。

1960年代後半にはほぼ書き終えられていたとされるソルジェニーツィンの『収容所群島』は、直接的には人権を訴えているわけでないが、その視点の普遍性において、まさに人権への道を切り開いたといえてよい。ここで強調されたのは、革命的暴力に対する普遍的な批判である。ソルジェニーツィンの『収容所群島』の刊行とそれをめぐる騒動が、ソ連の収容所体制の総体的な理解への重要なきっかけとなった理由は、ソルジェニーツィンのデビューから国外追放に至る経緯があまりに劇的だったこと、世界的には社会主義への幻滅と期待がちょうどバランスよい時代となり、「社会主義における自由」の可能性が広く論じられるようになってきたことなどの外的条件があげられようが、何よりも、『収容所群島』の内容における総合性と普遍性にある⁽⁵²⁾。

内容の総合性については、ソ連での収容所体制の確立の歴史を革命直後のレーニンの時代からスターリン批判以後まで網羅的に扱っていることがあげ

られる。そのなかでは農業集団化に伴う大規模な弾圧、収容所の囚人による建設、民族全体の流刑、捕虜になった人々の運命や収容所での反乱など、それまで「漏れ聞こえてきた」悲惨な事実を、収容所体制の確立と展開に関連づけて体系的に密度濃く論じたことについては比類がないものとなっている⁽⁵³⁾。

また普遍性については、第一に、ソルジェニーツィン自身が、収容所体験に経て、善悪の二元論を拒否するようになっていったプロセスが描かれていることである。その視点は、弾圧した人間の「悪」を糾弾するというよりも、誰もが状況によっては弾圧側となり、悪をなす可能性を強いる体制に対する告発にある。各人の心の中の「善悪の境界線が揺れ動く」という言葉に代表されよう⁽⁵⁴⁾、若き将校であることで傲慢であったソルジェニーツィンが、7年間の収容所生活における多くの辛苦や、自らの行動と判断の間違いを内省することにより、その生き様を謙虚に見直すことで「人間」に近づいていくプロセスが描かれるという倫理的な普遍性が特徴的である⁽⁵⁵⁾。

さらに人権につらなる普遍性として、ファシストとされた人々も含めて、スターリン体制の犠牲者として等しく描いたことにある。当時ファシストとして断罪された人びとの多くは無実であった。しかし、なかには、ドイツ占領下でドイツに協力した人々、さらにはドイツ側についてソ連軍と戦った人々もいた。終戦後、彼らはまさにファシストとして弁護の余地もない完全なる敵として、「死を運命づけられた」のだが、ソルジェニーツィンは、非道の体制の中でそのような選択をした彼らの「裏切り」の理由についても、人道的な眼差しで描いた⁽⁵⁶⁾。スターリン体制の非道が明らかになっている今でこそ、独裁体制で苦しむ民衆が、そこからの解放を願って別の体制に藁でもすがる思いでなしたこのような行動は理解が可能であるが、ソ連においてこの視点を明白に貫くことは、高度な普遍性を持たなければ不可能であった。

敵とされた人びとへの普遍的眼差しは、まさに犠牲を人権問題として取り

上げ、政治的弾圧を人権侵害として批判するという態度が、定着し始めていったことを示唆する。社会主義国家による弾圧に抗する人権擁護については、自由権が中心のブルジョア的権利とされ、高次のプロレタリアートの権利が優先されることで、敵の人権と味方の人権が峻別されてきたのだが、それらを区別なく貫く態度が、収容所体制への全面的告発から醸成されることで、どのような弾圧の理屈も正当化されることなく、人権侵害であるとして批判しうるだけの普遍性が形成されることが重要であった。スターリン主義を「理想を目指したにもかかわらず、悪に転化した政治的経験」とすると、「悪に転化しない」ような仕組みが不可欠となる。人権の役割は、まさに自らの集団だけに適用される正当性による排除の作用を和らげ、さらに無化しようとするにある。

最後に、スターリン主義が優勢だった時代から人権が浸透していく一方で、弱者救済の思想としての宗教が顕著になっていく現在の状況について簡単にまとめてみる。人権という概念は、スターリン主義と同じく弱者救済志向は強いが、はるかに理論的に一貫しておらず、「科学的」ではないとみなされてきた⁽⁵⁷⁾。また人権は、個別的なテーマへの闘争となりがちで弱者を救うた

表2 弱者救済の思想の特性

	スターリン主義	人権	宗教
弱者救済志向	◎	◎	◎
理論性（教義）	◎	△	○
連 帯 性	◎	△	◎
変 革 性	◎	△	○
反 欧 米	◎	△	◎
悪の正当化	◎	△	○
法的側面	○	◎	△
個 別 性	△	○	△
即 応 性	△	○	△
非 暴 力 性	×	◎	△
普 遍 性	△	◎	△

めの連帯すら図りにくく、大きな変革のための原動力としては弱いといえる。それに比べて、スターリン主義は、反資本主義や反ブルジョア、反ファシズム、そして反革命という目的により、革命的暴力が肯定され、法的手続きが軽視されることが繰り返され、理論的な「正しさ」と弱者救済志向の「正義」が結びつき、悪の正当化を容易にする。

革命的暴力が批判され、悪の事実が正当化されづらくなり、法的な手続きが重視されるような時代になっていくと、人権が弱者救済の思想を担うことになる。しかし、人権は、理論性、連帯性、変革性でスターリン主義には劣るので、理念として宗教が頼られ、さらに反欧米の流れも加わり、再び暴力的な変革が求められている。マルクス主義に関連したスターリン主義の重要性は減少したとはいえ、宗教的理想についてはいうまでもなく、人権の理想についても、それを暴力的に押し付ける場合にも、スターリン主義と同様の欠点が認められる。

人権が社会の変革力となるためには、弱者救済に失敗したスターリン主義のメカニズムについての徹底した考察に加え、連帯性を深めるためにヒューマニズムの復権と理論の確立が不可欠である。そのためにも、人権における普遍性、さらには政治、経済、社会、文化などあらゆる場面で抑圧されている人びとに緊急に対応しうる即応性を広く共有していくことが求められる。

《注》

- (1) ジュゼッペ・ボッファ（坂井信義訳）『スターリン主義とはなにか』大月書店、1983年、24-25ページ。
- (2) 「ソヴェト的解釈」「連続性の理論」「ロシアの報復」「全体主義論」「発展の革命」「テルミドール論」「国家主義」の優位」「工業専制主義」「その他の重要な寄与」などの章がある。
- (3) 前掲『スターリン主義とはなにか』17ページ。
- (4) ナチズムの場合は、その理念の正当性に対する支持は、スターリン主義に比

べれば時間的にも空間的にもはるかに少なかった。

- (5) エンツォ・トラヴェルソ（柱本元彦訳）『全体主義』平凡社、2010年、187ページ、前掲『スターリン主義とはなにか』99ページ。
- (6) 拙稿「転向論」『政経論叢』明治大学政治経済研究所、第82巻、第5・6号、2014年3月参照。
- (7) 吉本隆明はスターリニズムを考察するにあたり、「スターリニズムに耐ええなかったものは、アナキズム、またはアナルコ・サンジカリズムをめぐる、ファシズムに循環する。そして、ファシズムはふたたびスターリニズムに円環する。この閉じられた円環をうごかすものは、情況そのものの可変性にほかならない」と転向の軌跡について述べたうえで、徹底した考察の必要性を訴えた（吉本隆明「丸山真男論」（同『柳田国男論・丸山真男論』筑摩書房、ちくま学芸文庫、2001年所収）318ページ）。
- (8) ツヴェタン・トドロフ（大谷尚文訳）『民主主義の内なる敵』みすず書房、2016年、120ページ。
- (9) 同上、63ページ。
- (10) スチュアート・ヒューズ（荒川幾男、生松敬三訳）『ふさがれた道：失意の時代のフランス社会思想 1930-1960』みすず書房、1970年、159ページ。
- (11) 同上、160ページ。
- (12) フランシス・ジャンソンほか（佐藤朔訳）『革命か反抗か：カミュ・サルトル論争』新潮社、1953年、80-82ページ。
- (13) ヴィクトル・クラフチェンコ（井村亮之介訳）『私は自由を選んだ』上、下、ダヴィッド社、1949年参照。
- (14) 淡徳三郎編訳『クラフチェンコ事件の全貌』中央公論社、1949年、『中央公論』第64巻第10号別冊付録参照。
- (15) 大杉栄『ロシア革命論』大杉栄全集第7巻、現代思潮社、1963年、3ページ（初出『無政府主義者の見たロシア革命』序、叢文閣、1922年、2ページ）。
- (16) 同上、49ページ（初出「クロボトキンを想う ボルシェヴィキ革命の真相」『改造』第4巻第7号、1922年7月）。
- (17) 同上、25ページ（初出「ソヴィエト政府、無政府主義者を銃殺す」『労働運動』3次4号1922年4月）。
- (18) アレクサンドル・ソルジェニーツィン（木村浩訳）『収容所群島』新潮社（文庫版）、第1巻、第2巻、1975年。
- (19) ソルジェニーツィンは『収容所群島』の序で、その執筆の状況を次のように描いている。

「この書物を創るのはひとりの人間の手にあまることであった。私が自分の

目と耳を働かせ、自分の皮膚と記憶に焼きつけて、《群島》から持ち出せるだけ持ち出したもののほかに、総計 227 人に及ぶ人びとが、その物語や回想や手紙の形で、この書物の資料となるものを、提供してくれたのである。私はそれらの人びとに対して、ここで私個人の謝意を表することはしない。それはこの書物が迫害され責め殺されたすべての人びとのためにわれわれが一致協力してうち建てた鎮魂の碑であるからである。私はこれらの協力者のなかでも、特に、現在図書館にある蔵書や、とうの昔に絶版や解版され、その一冊でも捜し出すのに大きな忍耐を要した書物の中から、この著述に文献的裏付けとなるものを与えるべく私のために労苦を惜しまれなかった人びと（中略）の名を改めて特記したい気持ちでいっぱいである。しかしながら、私がそれらの人びとの名をあえて公表する時機はまだ訪れていない」。前掲『収容所群島』第 1 巻、1975 年、8 ページ。（改行省略）

- (20) クルイレンコの著作は、日本でもソ連社会主義法の紹介として、1930 年代に『ザヴェート権力の刑事政策』（プロレタリア科学研究所法及び国家理論研究会訳、希望閣、1930 年）や『ソヴェト法並に国家の哲学的基礎』（大竹博吉訳、ロシア問題研究所、1929 年）が翻訳紹介されている。
- (21) 大竹博吉「訳者序」（大竹博吉訳編）『反革命運動：ソヴェト裁判記録』、ロシア問題研究所編集『ロシア大革命史』、第 8 巻、平凡社、1932 年、12-13 ページ。
- (22) 同上、14 ページ。
- (23) 同上、31 ページ。
- (24) 同上、47 ページ。
- (25) 久保田栄吉（本名：寺田二三郎）は、この事件に関連して、自らが収監されていたブティルカ監獄に「名ある名僧が 430 名余程」が投獄されてきた様子を描いている（久保田栄吉『赤露二年の獄中生活』矢口書店、1926 年、184-185 ページ）。
- (26) 前掲『収容所群島』第 2 巻、34 ページ。
- (27) 前掲『反革命運動』、233 ページ。
- (28) 同上、237 ページ。
- (29) 同上、311-312 ページ。
- (30) 同上、312 ページ。
- (31) 前掲『収容所群島』第 2 巻、63 ページ。
- (32) 同上、97 ページ。
- (33) 同上、87 ページ。
- (34) 同上、第 3 巻、1976 年、32-95 ページ。

- (35) 内田義雄『聖地ソロフキの悲劇：ラーゲリの知られざる歴史をたどる』日本放送出版協会, 2001年参照。
- (36) ヨハネス・ラウレス『ロシアに於ける共産主義と其实相』カトリック思想・科学研究所, 1932年, 38-42ページ。
- (37) 同上, 50ページ。
- (38) 同上, 57-58ページ。
- (39) 同上, 67-68ページ。
- (40) アンドレ・ジイド(小松清訳)『ソヴェト旅行記 [改訂版]』岩波書店(岩波文庫), 1937年, 18-19ページ。
- (41) エドガール・モラン(田中正人訳)『ソ連の本質：全体主義的複合体と新たな帝国』法政大学出版局, 1986年, 90-92ページ。
- (42) 前掲『ロシア革命論』61ページ(初出「独裁と革命：無政府主義革命についての一問答」『労働運動』三次8号, 1922年10月)。
- (43) 同上, 62ページ。
- (44) 同上, 74ページ, (初出『労働運動』三次7号, 1922年9月)。
- (45) 山川菊栄『黎明期のロシア』1923年, 絵文館, 240-241ページ。
- (46) 同上, 242ページ。
- (47) エ・エル・ウィリアムス(梅原北明, 杉井忍訳)『露西亜大革命史』朝香屋書店, 1925年, 189ページ。
- (48) 20世紀はマルクス主義との格闘の歴史といってよい側面がある。その意味では、ここで挙げた本では不十分であることは言うまでもない。たとえばシベリア抑留に関する書籍はほとんど取り上げていない。シベリア抑留については、数多くの文献リストがあるが、たとえば、細川実「『シベリア抑留記録』100冊」『文芸春秋』臨時増刊「読者の手記シベリア強制収容所」1982年, 9月, 138ページ, 若槻泰雄『シベリア捕虜収容所 ソ連と日本人』下巻, 1979年, サイマル出版会, 463-477ページ, 富田武, 長勢了治編『シベリア抑留関係資料集成』みすず書房, 2017年など。また雑誌論文についてもここでは扱っていない。
- (49) 拙稿「ソ連異論派研究序説」『明治大学大学院紀要』政治経済学篇, 第22巻, 1985年2月参照, 同「CSCEと人権」『明治大学社会科学研究所紀要』第33巻, 第2号, 明治大学社会科学研究所, 1995年3月参照。
- (50) マイケル・フリーマン(高橋宗瑠監訳)『コンセプトとしての人権 その多角的考察』現代人文社, 2016年, 47, 50-51ページ。
- (51) サミュエル・ハンチントン(坪郷實, 中道寿一, 藪野祐三訳)『第三の波：20世紀後半の民主化』三嶺書房, 1995年参照。

- (52) 「群島」や「グラグ」というネーミングがまさに的確だったことも重要である。
- (53) たとえば、2004年にピューリッツァー賞を取ったアブルボームの『グラグ』も、綿密な取材と新たに公開された膨大な資料を利用しているが、『収容所群島』の骨格をなぞっているように見える（アン・アブルボーム（川上洸訳）『グラグ：ソ連集中収容所の歴史』白水社、2006年）。
- (54) 前掲『収容所群島』第1巻、247-248ページ、第4巻、1976年、392-393ページ。
- (55) 「以前のあなたは誰にも何をも許そうとしなかった。あなたは容赦なく人々を批判し、同じように過度に人々を称讃した。今は理解力のある柔和さがあなたの非原則的な判断の基礎となった。あなたは自分の弱さを知った。だから、他人の弱さも理解できるようになったのだ。他人の強さにも驚くようになった。そして、その強さをまねしたい、と望むことができるようになったのである。」同上、第4巻、385-386ページ。
- (56) 同上、第5巻、1978年、特に、第5部第1章「死を運命づけられた人びと」、8-56ページ。
- (57) 前掲『コンセプトとしての人権』61ページ。